**目次**

[1．はじめに 2](#_Toc67677643)

[2．先行研究の検討 6](#_Toc67677644)

[3．資料と方法 9](#_Toc67677645)

[3.1．資料 9](#_Toc67677646)

[3.2．方法 9](#_Toc67677647)

[4．分析と考察 10](#_Toc67677648)

[5．結論 11](#_Toc67677649)

[6．参考文献・資料 12](#_Toc67677650)

# はじめに

　近年、ベトナムと日本の関係は、文化の面でも経済の面でも深まっている。文化の面では、2018年の日越外交関係樹立45周年で、ハノイ・日本文化交流祭や日越音楽祭などの多くの事業がおこなわれた。2016年9月には日越大学修士コースが開設された。日本の大学もベトナムでの拠点を設立し、2014年には41件である。スポーツについても、2014年に本サッカー協会（JFA）と越サッカー連盟（JFF）のパートナーシップ関係を締結した。経済の面では、2017年末時点での累計投資認可額は495億ドルで、4年ぶりに金額1位である。また、2017年の貿易は中国、アメリカ、韓国に次いで第4位の334億ドルの輸出入金額である[[1]](#footnote-1)。

　両国の関係が深まるにつれ、日本で暮らすベトナム人の数は増えてきている。独立行政法人日本学生支援機構[[2]](#footnote-2)によると、2017年末には、日本に居住するベトナム人は約33万人、そのうち、留学生数は約8.1万人であり、76万人の中国人と45万人の韓国人に次いでいる[[3]](#footnote-3)。また、2019年度にはベトナム人留学生が73.389人であり、去年度に比べて、1035人増えた[[4]](#footnote-4)。

　そして、日本語を勉強するベトナム人の数も増えてきている。日本国際交流基金によると、2012年にはベトナム人日本語学習者は46.762人であり、2015年には64.863人で8位である[[5]](#footnote-5)。そして、2018年にはこの人数は174.521人であり、圧倒的に昨年の169.1%まで増え、6位に上った[[6]](#footnote-6)。

　日本語を勉強するベトナム人にとって、一番難しいのは漢字である。日本語学力テスト「NAT-TEST」では、１級は約1.850字を検定している[[7]](#footnote-7)。日本漢字能力検定では、2級で約2.136字、さらに1級で約6.000字まで検定している[[8]](#footnote-8)。

　大量の漢字を覚えるのが大変だが、漢字の表記もベトナム人にとっては悩ましい問題である。たとえとして、辞書で「アヤマル」を調べてみると、同じ読みで漢字が違う「誤る」と「謝る」が立項されている。このような問題は、一般的に「異字同訓」と呼ばれる。

　まずは、異字同訓の定義を確認する。

　沖森は、異字同訓について、「字義が相異なり、その用法も相違する漢字が訓を同じくする場合を『異字同訓』と呼ぶ」（沖森　2014、p.9）と述べている。同時に、異字同訓として扱われない例外も挙げている。

（A）品詞が違う場合  
（B）同じ品詞でも、意味が異なる場合  
（C）同じ品詞でも、語の性質が異なる場合

（沖森　2014、p.10-12）

　つまり、以上の例外は異字同訓ではないということである。

　また、沖森は書き分けの問題については、「使い分けに一定の指針が求められる」（沖森　2014、p.13）と述べ、つまり異字同訓には書き分けの問題があるということである。

　山田は、異字同訓の問題について、「字形」、「音形」、「意味」の3項目の関係として整理している。すなわち字形が異なり音形が同じで意味が類似している語が異字同訓として書き分けの問題があるのである（山田　2014、p.14-15）。そして、例として山田は［作る／造る］、［長い／永い］を挙げている。一方で山田は、字形が異なり音形が同じで意味が非類似している語が「異字同音異義」であり（山田　2014、p.14)、つまり異字同訓ではないのである。

　したがって、本論文では、異字同訓の書き分けの問題を解決するため研究を行う。

　しかし、異字同訓は、語の認定の問題に関連し、単純ではない。語の認定の問題は、語の長さと語の幅の問題である。語の長さの問題とは、日本語では分かち書きをしないため、何が1つの語か、どこで区切りをするのかは明確ではないということである。一方、語の幅の問題とは。。。。。こうして、異字同訓は語の幅に関連りている。つまり、異字同訓は多義語にかかわる現象と考えられるし、一方で類義語にかかわる現象とも考えられる。

　異字同訓は多義語にかかわる現象と考える場合とは、［作る／造る］、［長い／永い］のような、字形が異なり、音形が同じくして意味が類似している「異字同音類義」の語は一つの多義語と考えるということである（山田　2014、p.14）。逆に、異字同訓は類義語にかかわる現象と考える場合とは、表記が異なる別の語と考えるということである。実際に辞書の見出しを見てみると、『。。。辞典』には「暑い」と「熱い」は別に立項されている。つまり、『。。。辞典』は「暑い」と「熱い」は別の語として見なしているということである。しかし、この場合は「暑い」と「熱い」の意味が類似している。

*引用。。。。*

　「暑い」と「熱い」は、「。。。」という点において意味が共通しているが、一方で使用対象という点において意味が異なっている。つまり意味の大部分が同じであるが、実の細かいところが異なっており、「暑い」と「熱い」は類義語の関係にあると言えるのである。

　先ほど確認した通り、沖森は異字同訓の定義を上げる同時に3個の例外も挙げているため、検討しにくくなっている。したがって本論文では、山田の定義に従い、異字同訓を多義語の意味に応じた書き分けの問題として考えて論を進める。

　本論文は、主に4章にわたって論を進める。

　第1章では、先行研究として、各辞書の「かたい」の解説を検討し、問題点を指摘する。

　第2章では、資料を取集し、研究対象を決め、研究方法を述べる。

　第3章では、前編では「かたい」が使用される場面を分析し、使用傾向を考察する。後編では「かたい」と共起する名詞・動詞を分析し、共起する名詞・動詞の種類を考察する。

　第4章では、第3章で行った分析・考察に基づき、異字同訓として「固い」「硬い」「堅い」の使い分け問題を解説する提案を挙げる。そして今後の課題として、適切ではない部分を指摘する。

　「固い」「硬い」「堅い」が使用される場面や共起する動詞・名詞を分析することを通じて、「固い」「硬い」「堅い」が異字同訓としての使い分けを明らかにし、日本語学習者が「固い」「硬い」「堅い」の使い分けを理解できるように目指したい。

# 1．先行研究の検討

2014年に『「異字同訓」の漢字の使い分け例（報告）』が文化審議会国語文学会により発表された。『「異字同訓」の漢字の使い分け例（報告）』の前書きには以下のように記述されている。

同訓の漢字の使い分けに関しては、明確に使い分けを示すことが難しいところがあることや、使い分けに関わる年代差、個人差に加え、各分野における表記習慣の違い等もあることから、ここに示す使い分け例は、一つの参考として提示するものである。したがって、ここに示した使い分けとは異なる使い分けを否定する趣旨で示すものではない。また、この使い分け例は、必要に応じて、仮名で表記することを妨げるものでもない。

（文化審議会国語文学会　2014、p.2）

　つまり、報告に示された「使い分け例は、一つの参考」であって、強制力をもった規則ではないということである。これは「仮名で表記することを妨げるものでもない」と書かれていることにも通じている[[9]](#footnote-9)。

　『「異字同訓」の漢字の使い分け例（報告）』には、通用漢字表[[10]](#footnote-10)に示された同訓の漢字133組が上げられいる。例えば、「あし【足】・【脚】」や「きく【聞く】・【聴く】」などである。ただし、同訓の漢字であっても、通用漢字表に入っていない字は使い分け例表に含まれていない。

　まずは、『「異字同訓」の漢字の使い分け例（報告）』の記述を確認する。『「異字同訓」の漢字の使い分け例（報告）』には、以下のように説明を書かれている。

かたい  
【堅い】中身が詰まっていて強い。確かである。  
堅い材木。堅い守り。手堅い商売。合格は堅い。口が堅い。堅苦しい。  
【固い】結び付きが強い。揺るがない。  
団結が固い。固い友情。固い決意。固く信じる。頭が固い。  
【硬い】（⇔軟らかい）。外力に強い。こわばっている。  
硬い石。硬い殻を割る。硬い表現。表情が硬い。選手が緊張で硬くなっている。

（文化審議会国語文学会　2014、p.12）[[11]](#footnote-11)

　『三省堂現代新国語辞典　第十刷発行』には「かたい」は以下のように記述されている。『三省堂現代新国語辞典』には「固い」、「硬い」と「堅い」は別の語として扱われ別に立項されている。

かた・い  
【固い】〈形〉  
①（水分が少なく）中身がしまっていて、形がかんたんには変わらない。  
「―餅・粉を固く練る」  
⇔柔らかい  
②しっかりしていて、かんたんにはくずれない。  
「―団結・―約束」  
⇔もろい  
③気持ちがしっかりしていて変わらない。  
「決意が―・固く信じる」  
④すきまがなくて、かんたんには動かない（・ほどけない）。  
「障子が―・―結び目」  
⑤しっかり力がこもっている。  
「固くだきしめる・―握手」  
⑥きびしい。  
「固いましめる」  
⑦たしかだ。まちがいない。  
「合格は―」  
⑧融通がきかない。がんこだ。  
「頭が―」  
固くなる：緊張しすぎて身体や気持ちがこわばる。「あまり―な」  
【硬い】〈形〉  
①［金属・石などについて］力を加えても、まがったりへこんだりしない。  
「―宝石」  
②よく練れていない。  
「―表現」  
③こわばっている。  
「表情が―」  
⇔軟らかい・柔らかい  
【堅い】〈形〉  
①［材木などについて］力を加えても、まがったりへこんだりしない。  
「―材質」  
⇔柔らかい  
②守りがしっかりしている。  
「城の守りが―」  
⇔もろい  
③手がたい。堅実だ。  
「―商売」  
④ましがないくて信用できる。  
「―店」  
⑤まじめて、義理がたい。  
「―人間」  
⑥かたくるしい。  
「―話・―ことばかり言う・堅く考えなくてよい」

（市川　孝　2001、p.203）

　つまり、「固い」には8個の意味があり、「硬い」には3個の意味があり、「堅い」には6個の意味があるということである。詳細に意味が分類されているが、代表的な意味が分かりにくく、日本語学習者にとって使いにくい。また、意味が重複している部分があるように見えるのである。

　『角川必携国語辞典　初版発行』には「かたい」は以下のように記述されている。

かた・い  
「一」【固い】〈形〉  
　①物をぶつけてもたやすくこわれない  
　「―石」  
　②ことがらや状態が簡単には変わらない。強く厳しい。  
　「―決意」「―団結」「―友情」「固く信じる」「固く禁ずる」「頭が―」  
「二」【堅い】〈形〉  
　ものごとの性質がしっかりしている。確実で信用できる。  
　「身持ちが―」「合格は―」「口が―」「―話」  
　⇔柔らかい  
▶「一」と「二」の漢字の使い分けは明確ではない  
「三」【硬い】〈形〉  
ものの性質や心情などがこわばっているようす。ゆとりやおもしろみなどがない。  
「表情―」「態度―」「―文章」  
⇔軟らかい

（大野　晋、田中　章夫　1995、p.237）

　『三省堂現代新国語辞典』と同じく、『角川必携国語辞典』にも「固い」、「硬い」と「堅い」は別の語として見なされている。「『一』と『二』の漢字の使い分けは明確ではない」（大野　晋、田中　章夫　1995、p.237）と記述されているが、このような記述が辞書の利用者、つまり日本語学習者にとって何も役に立たなくなるのである。

　『学研 現代新国語辞典　改訂第三版』には「かたい」は以下のように記述されている。

かた・い【堅い・固い・硬い】《形》  
①物が、力を加えられても容易に形をかえない性質である。質が強くじょうぶである。  
「―・い気の実」「―・い鉄の箱」  
［参考］音・声などが重く強い意にも使う。  
「金属と石のぶつかる―・い音」  
⇔やわらかい  
②きっちりとしていて、すきまがない。堅固である。  
「唇を―・く閉じる」「守りが―・い」  
③動作・顔つきなどに柔らかみがない。こわばっている。  
「―・くなって返事をする」  
④心の状態や言行が容易に変わらない。  
「―・く決心する」「―・い約束」  
⑤身持ちがたしかである。実直である。  
「身を―・く守る」  
⑥がんこで融通がきかない。かたくなである。  
「頭が―・い」  
⑦物事が確実である。堅実である。  
「合格は―・い」「―・い商売」  
⑧厳格である。きびしい。〔副詞的に使う〕  
「―・くお断りいたします」  
⑨ふざけたところがない。まじめである。  
「―・い本を読む」  
⇔やわらかい  
文：かた・し《く》  
【使い分け】  
『堅い』  
〔質がしまって割れにくく、折れにくい。堅実。確実〕  
堅い材木・堅いつぼみ・堅焼き。音意志が堅い・口が堅い・義理堅い・優勝は堅い・手堅く得点する  
『固い』  
〔城壁を守るように、外から侵すことのできぬほど強くかたい〕  
地盤が固い・固く団結する・固く辞退する・口を固く閉さす・守りが固（堅）い・決意が固い・固い握手・頭が固い  
『硬い』  
〔「軟」の対。石のように、たやすく砕けたり裂けたりしない〕  
硬い玉・硬い髪・表情［態度］が硬い・体［皮肩］が硬い・硬さがほぐれる・硬い文章・話が硬い

（金田一　春彦　2002、p.224）

　『学研現代新国語辞典』では「固い」、「硬い」と「堅い」は1つの語として見なされ記述されている。

以上述べた通り、山田によると異字同音類義語、いわば異字同訓には書きわけの問題があるため、金田一はその3つの表記の使い分けをして述べている。

　『デジタル大辞泉』には、「かたい」は以下のように記述されている。

かた・い【堅い】  
①外力に対する抵抗力が大きく、容易に形を崩さない。  
　「―・い殻を割る」  
　「―・くてかめない肉」  
　⇔やわらかい  
②  
　㋐物が強い力でぴったりとすきまなく合わさっている。  
　　「―・く扉を閉ざす」  
　　「帯を―・く結ぶ」  
　　「―・い握手を交わす」  
　㋑力を加えても、抵抗があって、滑らかに動かない。  
　　「栓が―・い」  
③（内にあるものが）強くて、外からの力に負けない。しっかりしていて、揺るがない。  
　「―・い信念」  
　「―・い約束」  
　「守りが―・い」  
　「口が―・い」  
④厳格である。きびしい。  
　「―・く禁ずる」  
　「身持ちが―・い」  
⑤  
　㋐確かで、あぶなげがない。信用がおける。手堅い。堅実だ。  
　　「―・い商売」  
　　「当選は―・い」  
　　「予算を―・く見積もる」  
　㋑取引で、相場が一向に下がるようすがない  
　㋒何事もいいかげんにせず、きちんと扱うさま。まじめである。  
　　「―・くて信用のおける人」  
　　「―・い本」  
　　「そう―・ことを言うな」  
⑥自由な感じや、柔らかな感じに欠けたようすをいう。  
　㋐自在な動きができない。融通がきかない。  
　　「からだが―・い」  
　　「頭が―・い」  
　　⇔やわらかい  
　㋑（表現などが）いかめしかったり、こわばったりしていて、すなおに人の気持ちに入ってこない。  
　　「文章がまだ―・い」  
　　「デッサンの線が―・い」  
　㋒鋭くて張りつめた感じを与える。  
　　「―・く乾いた音」  
　　「表情を―・くして事態の推移を見守る」  
　㋓緊張から、気持ちにゆとりがなくなる。言動がぎくしゃくする。  
［補説]漢字の使い分けは「固い」が広く用いられ、「硬い」は物の性質、「堅い」は状態・ようすに用いられることが多い。

（『デジタル大辞泉』　2021年02月閲覧）

　『デジタル大辞泉』の記述によると「かたい」は13個の意味ほど持っている。さらにその中に9個の意味は詳細しすぎる。13個の詳細しすぎの意味の記述は日本語学習者にとって非常に分別しにくく、正しく適用できないと見える。また、『デジタル大辞泉』は「堅い」の表記で記述していることは、学習者は「堅い」の表記は通常表記だと誤解しがちの問題が挙げられる。

　上記した問題に加え、記述の統一の問題が挙げられる。確かに各辞書は細かい解説を記述したり体表的に記述したりしているが、辞書の解説、特に漢字の使い分けが統一ではないことは日本語学習者にとって理解しにくく困難である。また、「かたい」の語の認定、つまり類義語か多義語かは辞書によって異なるため、学習者は「かたい」の語の本質は見えなくなる問題が起きている。

　以上挙げた問題の根源は、辞書の特徴からであると言える。そもそも辞書は著者の主観的な考えで記述されたもので、人によって考え方が異なるのにつれて、辞書の記述も異なっている。一方でコーパスは、

辞書：筆者の主観的考え／コーパス：客観的

辞書Aを書いた人と辞書Bの書いた人の主観的考え方がちゅがう。

本研究では客観的なコーパスを通じて研究する（違う資料・違う方法）

→３にの繋がり

# 2．資料と方法

## 2.1．資料

　本研究では、『現代日本語書き言葉均衡コーパスBCCWJ』（以下BCCWJを代表として記述する）を利用して、コーパスからデータを抽出して分析する。データを抽出には、コーパス検索アプリケーション「中納言」を用いた。

## 2.2．方法

　研究方法については、本論文ではコーパスを利用する。コーバスの定義は以下に記述する。

言語のテクスト集合体をコーパス（corpus、複数形corpora）と呼ぶ。一般的には、実際に使用された話しことば・書きことばを、ある言語や言語変種の代表となるように集め、コンピューター上で検索可能にしたものを指す。

（斎藤・田口・西村　2015、p.89）

　コーパスから抽出したデータを分析して、語の表記の使用頻度によって考察する。

# 3．分析と考察

# 4．結論

# 参考文献・資料

1. 斎藤　純男・田口　善久・西村　義樹（2015）「コーパス言語学」、『明解言語学辞典』、三省堂、p.89。
2. 沖森　卓也（2014）「異字同訓とは」、宮地　裕・甲斐　睦『日本語学』、明治書院、p.9。
3. 山田　進（2014）「意味から見た異字同訓」、宮地　裕・甲斐　睦『日本語学』、明治書院、p.14-15。
4. 文化審議会国語分科会（2014）「『異字同訓』 の漢字の使い分け例（報告）」、宮地　裕・甲斐　睦『日本語学』、明治書院、p.64。
5. 大野　晋・田中　章夫（1995）『角川必携国語辞典　初版発行』、角川書店、p.237。
6. 市川　孝（2001）『三省堂現代新国語辞典　第十刷発行』、三省堂、p.203。
7. 金田一　春彦（2002）『学研 現代新国語辞典　改訂第三版』、学研研究社、p.224。
8. 小学館『デジタル大辞泉』、2021年02月時点閲覧。
9. 日本国際交流基金（2017）『海外の日本語教育の現状　2015年度日本語教育機関調査より』、p.13。
10. 日本国際交流基金（2020）『海外の日本語教育の現状　2018年度日本語教育機関調査より』、p.15。

国語審議会漢字部会（1972）「『異字同訓』 の漢字の用法」、ｐ.6。

中馬　愛（2019）「ベトナムにおける日本の大学の協力状況・国費留学生・留学生を巡る問題」、ウェブマガン『留学文流　2019年6月号Vol.99』、JASSO、p.50。

1. 出所：https://www.vn.emb-japan.go.jp/files/000352067.pdf [↑](#footnote-ref-1)
2. 独立行政法人日本学生支援機構とは、日本において、主に学生に対する奨学金事業や留学支援・外国人留学生の就学支援を行う独立行政法人（中期目標管理法人）である。JASSOとも呼ばれる。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 出所：中馬　愛（2019）「ベトナムにおける日本の大学の協力状況・国費留学生・留学生を巡る問題」、ウェブマガン『留学文流　2019年6月号Vol.99』、JASSO、p.50。 [↑](#footnote-ref-3)
4. 出所：独立行政法人日本学生支援機構（2020)『2019（令和元）年度外国人留学生在籍状況調査結果』、p.?? [↑](#footnote-ref-4)
5. 出所：日本国際交流基金（2017）『海外の日本語教育の現状　2015年度日本語教育機関調査より』、p.13 [↑](#footnote-ref-5)
6. 出所：日本国際交流基金（2020）『海外の日本語教育の現状　2018年度日本語教育機関調査より』、p.15 [↑](#footnote-ref-6)
7. 出所：http://www.nat-test.com/contents/comparison.html [↑](#footnote-ref-7)
8. 出所：https://www.kanken.or.jp/kanken/outline/degree.html [↑](#footnote-ref-8)
9. 日本語では、そもそも正書法が存在しない。 [↑](#footnote-ref-9)
10. 通用漢字表には、2136字が入っている。 [↑](#footnote-ref-10)
11. 記録047番 [↑](#footnote-ref-11)